

# われに千里の思いあり

中村彰彦（文学部）

書評…東北大出身者しばりということで、私は文学部出身の中村彰彦氏の作品、『われに千里の思いあり』を紹介しようと思う。本書は加賀藩主前田利常・光高・綱紀の三代を描いた歴史小説である。その中でも、上・中巻の中心となるのが、加賀藩の繁栄と安定をもたらしたとされる名君利常である。

昨今のゲーム等の影響で、前田利家や前田慶次の名前はいくらか有名になったようだが、前

田利常の名前を知っているという方は少ないのではないだろうか。彼は前田利家の側室（本書では洗濯女）の子で、本来藩主となるべき子ではなかったが、兄の死を受けて加賀藩主となつた人物である。加賀百万石と称されるように、加賀藩は外様最大の大名家であり、利常は徳川家から警戒されないようにわざと鼻毛を伸ばしてバカ殿を演じていたという逸話もある。井伊直孝に自分の股間を見せつけたという話もある。

私は昨年度の逍遙幻想道学祭号の企画である、「美少女書評」においても中村氏の作品『豪姫夢幻』を紹介した。中村氏は歴

史上の表舞台の有名な人物以上に家臣や女性を描くのに長じた作家だと私は思う。本書においても、徳川秀忠の娘で利常の妻である珠姫や女中のお鏡、利常の腹違いの姉である豪姫など、魅力的な女性が多く登場する。特に珠姫と利常が夫婦となつた時は利常八歳、珠姫二歳であり、その可愛らしさの破壊力が尋常ではない。（文春文庫／800円／担当：水無月朔）

